

「ごめんなさいが言えなくて」

— 2 稿 —

2025/4/18

作者名 さいの

〈人物表〉

林田 一成	(24)	丸バツ商事に勤める会社員
五十嵐 佳織	(25)	林田と同期入社と同僚
山岸 亮	(23)	林田と同期入社と同僚
早川 咲希	(24)	林田と同期入社と同僚

1. 丸バツ商事オフィス・給湯室（昼）

こぢんまりとしたオフィスの隅にある給湯室。

林田一成（24）がボケっとした顔で立っている。

目線の先には電子レンジ。中で弁当箱が回っている。

給湯室に入ってくる人影。林田が振り向くと、五十

嵐佳織（25）が弁当箱片手に立っている。

林田、佳織に驚く。佳織、目をそらす。

林田 「あ、今使って……」

佳織、踵を返して立ち去る。

林田、固まる。レンジの電子音。

2. 焼き鳥居酒屋（夜）

賑やかな店内の一角にある四人がけテーブル席。

テーブルの上には食べ終わった皿や空のジョッキ。

山岸亮（23）と早川咲希（24）が並んで座っている。向かいに座る林田に向かって、

山岸 「キャラメル？」

咲希 「マキアート？」

林田、俯き加減でじっと座っている。

林田 「うん。アイスの、トールサイズ」

山岸 「えっと、なんの話だったっけ？」

咲希 「先週から佳織に避けられてるって話」

山岸 「だよね」

林田、訴えかけるような目線で、

林田 「これ本当に偶然なんだけど、佳織ちゃんも全く同じやつを買って来てたの。で、席隣だったし」

咲希 「ああ、会社の前の喫茶店か」

林田 「わざとじゃ無いんだよ。隣に置いてたから、どっちか分かんなくなってる」

山岸 「いや分かったけどさ、人の飲み物間違ってるって飲んだくらいで、無視される？」

咲希 「謝ったらしい話だよ」

山岸 「うん。一回奢ってあげたりすればね」

咲希 「え、謝ったんでしょ」

林田、顔を逸らす。もじもじして、
林田 「俺、謝るのってなんか、苦手だ」
咲希・山岸 「は？」
と、茫然顔の二人。

3. クラブ・バーカウンター（夜）

カウンターに座るへべれけな三人。陽気な音楽。
咲希 「ごめんなさいって言うだけでしょが」
と、カウンターのベルを三回鳴らす。

林田、泣きそうな顔。

林田 「分かってんだけど、なんか気持ち悪いんだよ」

咲希 「気持ち悪いって何？」

林田 「なんていうか、謝んなきゃって思うと、全身ゾ
ワっとして、言うこと聞かないっていうか」

咲希 「ああもう、ウジウジすんな」

店員、人数分のショットグラスを持ってくる。
飲み干す三人。山岸、テーブルに突っ伏す。

咲希 「黙ってんのが一番キモいからね。間接キスして知
らんぷりって、超ヤバイやつじゃん」

林田 「どうすればいい？」

咲希 「そりゃ、腹決めて一気に。こう、エイヤーっと」

と、山岸を叩く。山岸、フラフラと起き上がる。

林田 「避けられてるから、タイミング分かんなくて」

咲希 「（呆れて）どうしようもないなあ」

と、カウンターのベルを三回鳴らす。

山岸 「……もう、飲めないって」

4. 林田の自宅マンション（朝）

アラームの音。ベッドの上の林田、目を開く。
起き上がって、ゆっくりと背伸び。

通知音。スマホ画面には咲希からのメッセージ。
「十一時に第三会議室」の文面。

丸バツ商事オフィス・第三会議室（昼）

六畳くらいの手狭な会議室。

林田、落ち着かない様子で座っている。

机の上には喫茶店の紙袋。扉が開く音。

林田、反射的に顔を机に突っ伏して固まる。

佳織が半開きのドアから中を覗き込んでいる。紙袋の影に頭が隠れたままの林田を見て、怪訝な表情。

佳織、誰だか分からないまま部屋に入ってくる。

佳織 「あの」

林田 「……」

佳織 「ここ、十一時から予約してたと思うんですけど」

林田、紙袋で顔を隠したままゆっくりと頭を上げる。

佳織、困惑。

林田、紙袋から飲み物の入ったプラカップを一つ取り出して、佳織にぐっと突き出す。

佳織、押し付けられた形で、受け取る。

佳織 「は？」

林田、その体勢のまま紙袋からストローを一本取り出して、佳織に突き出す。佳織、受け取る。

林田、紙袋を持つ手が震えている。

林田 「（小声で）エイヤー……」

佳織、再び困惑。

林田、咄嗟にお腹を抑え、固まる。

佳織 「え、なんですか？」

林田のお腹から、ギュルツという音。

林田、顔を隠したままゆっくり立ち上がり、去る。
一人残された佳織。手にはプラカップとストロー。

5. 丸バツ商事オフィス・男子トイレ（昼）

林田、個室から出てくる。水の流れる音。

通知音。スマホ画面には咲希からのメッセージ。

「エイヤー？」の文面。

6. 丸バツ商事オフィス・休憩室（昼）

自販機とベンチだけが置かれている休憩室。

咲希、林田に缶コーヒーを渡し、横に座る。
咲希 「何がそんなに気持ち悪いの？」

林田、しょんぼりと俯き加減で座っている。

林田 「……謝るって、偽善じゃんか」

咲希 「は？」

林田、パッと咲希の方を向いて、

林田 「謝って得するのって、謝る方だけじゃんか。許してもらえたら、安心できるし」

咲希 「はあ」

林田 「でも謝られた方は、損しかしないの。もう悪いことされてて、それは変わらないのに許してくれて、チャラにしてくれて滅茶苦茶言われてんの。そんなの卑怯でしょ」

咲希 「急にめっちゃ喋るな」

林田 「それなら、許されないまま苦しむ方がいいんだ」と、遠い目。

咲希 「え、キャラメルマキアート飲んだだけだよ」

林田 「俺には罰が必要なんだ」

咲希 「なんでもいいけど、佳織、まだ怒ってるんでしょ」

林田 「（耳を塞いで）言わないで」

咲希 「理屈捏ねたって、誰も聞いちゃくれないんだよ」
咲希、林田の胸ぐらを掴んで、

咲希 「あんたには佳織をなだめる義務があんの。善悪の問題じゃなくて、謝る道理があるの」

林田、泣きそうな顔。

咲希、立ち上がって、

咲希 「定時までこのままだったら、今日奢ってもらうから。それが謝らないことの罰」

林田 「……どうしてそこまで」

咲希 「だって、また同期四人で飲みたいじゃん」
咲希、立ち去る。林田、コーヒーを啜る。

7.

丸バツ商事オフィス・執務室（夜）

壁掛け時計が夜の六時を指している。

佳織、自分の席でパソコンを叩いている。
遠くの席に座る林田、喫茶店の紙袋で顔の下半分を
隠しながら、その様子を伺っている。
佳織、荷物をまとめて立ち上がる。
佳織 「お先しまーす」

佳織、執務室から出ていく。林田、立ち上がる。
焦って駆け出す林田の足元

8. 丸バツ商事オフィス・エレベータホール（夜）

林田、エレベータホールに駆け込み、エレベータに
乗り込む佳織を見つける。

9. 丸バツ商事オフィス・エレベータ内（夜）

佳織、エレベータに乗り、閉ボタンを押す。
ドアが閉まり出すが、林田、間一髪手を差し込む。
ドアが開いて、目が合う二人。佳織、驚く。
乗り込む林田。息が荒い。
ドアが閉まり、エレベータが動き出す。

佳織 「え？」

林田 「あ、あのさ」

林田、息を整えながら、

林田 「こんなこと、今言われても嬉しくないかもだけど」

佳織 「……」

林田 「俺の自己満足だから、許さなくてもいいんだけど」

佳織 「……」

林田 「ごめんなさい」

と、深々頭を下げる。固まる二人。

佳織、吹き出す。笑いを堪えながら、

佳織 「……ちよっと、怖いんだけど」

林田、顔を上げる。

エレベータのベルの音。ドアが開く。

（終わり）